杉本苑子

愛憎流転

愛憎流転

杉本苑子

愛 憎 流 転

第1刷発行　昭和47年4月8日

定価　820円

著者　杉本苑子

発行者　野間省一

発行所　株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21　〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京 3930

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。　©1972 杉本苑子

0093-300773-2253（0）　(文2)

目次

花冷え　七
夢候よ　一一
巣ごもり鶴　一一〇
足かせ　一一四
ゆく年　一一四
華燭　一一四
若い父　一一四
ほたる火　一一五
再会　一一六
桶狭間　一一七
おんな武士　一一八
処刑　一一八
血と雨　一一九

かわいい女　九
幼な妻　一〇七
小蛇　一一三
築山御殿　一一三
もつれ髪　一一六
三方ガ原　一一九
おとし穴　一二七
歯型　一四五
いのち　一五七
さくら鞭　一六一
於義丸　一六八
麦笛　一七五
針売り　一八五
つばくろ　一九二
眼光　二〇〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

竹のこざり　二〇六
朝焼け　二一五
兄弟　二二四
嘲弄　二三〇
鷹　二三八
狂気　二四二
孤立　二五六
別れ霜　二六七
闇はあやなし　二七四
凍て蝶　二八二
桃かがり　二八九
鳥籠　二九七
毒薬　三〇六
流れ星　三一二
伊達駒　三二〇

銀河　三二八
刃傷　三三五
山ゆり　三四二
初雁　三五二
鬼あざみ　三五八
十二年　三六七
天下布武　三七六
帰路　三八六
悶情　三九三
白髪　四〇〇
雨しとど　四〇八
待つ宵　四一六
痛恨　四二三
門扉　四三二

装幀　宮田雅之

愛憎流転

花冷え

桜は、あらかた散ったというのに、ここ四、五日、冬に逆もどりしたかと思うほど、寒気がきびしい。

空腹には、それもこたえた。

昨日から、まともなものをなにひとつ、口に入れていないのである。

野びるを抜いて噛んだ。いたどりの芽も、にがずっぱいのをがまんしてかじった。

あまなの根はうまかった。

「そのはずさ、お前、山くわいともいってね、こいつはゆり根の兄弟ぶんだもの……」

餓えがちな放浪の毎日に学んだのか、食べられる草や木の名に、えんまはばかにくわしいが、なまじ少しばかり補給したおかげで、ひもじさはかえってひどくなった。

胃の腑があばれる。しくしく痛む。

とうとう、たまらなくなって、

「もう歩けない」

泣きじゃくりながら、おちいは畦道に膝をついてしまった。

「だめだなあ、だからついてくるなっていったんじゃないか。弱虫」

舌うちしたものの、えんまの腹のすき加減も、おさおさ、おちいにおとらない。

夜行獣さながら、闇でも見えるとじまんする眼を、彼女はあたりにくばって言った。

「よし、盗んできてやる」

農民たちの弁当が、畦のあちこちに散らばっている。

三河の野は、いま田ごしらえのまっさかりだ。まだ、げんげ田の荒起しに、余念のない組がある。土くだきをすっかり終って、水もれ防ぎのねずみ穴を、杵で叩いて埋めている田も見える。

と思うと、いっぽうでは、馬にまン鍬を曳かせながら、すでに代掻をはじめている早手まわしな田もあった。

「ヘッ、やせっひょろげの水呑みめら……。どうせやつらの昼めしだ。朴の葉包みの豆腐カスか、よくってせいぜい豆まじりの稗マンマだろうが、木の芽で腹をごまかすよりはましさ。待ってろよ、おちい」

姉さんぶった口をきくけれども、えんまは十一――。

「よして。みつかったらたいへんよ」

びくびく顔でとめるおちいは、やっと七歳の童女にすぎない。

「ばかいえ。そんなヘマをするもんかい」

骨ばった背に、ななめにくくりつけている笹琵琶を、紐

ごとはずしておちいに渡すと、
「いいか、これ、持ってるんだぞ」
なにくわぬ顔で、えんまは畦を歩きだした。
おちいの胸の鼓動がはやくなった。
(とれるかしら。うまくいくといいけどな)
恐怖を忘れた。思わず祈る気持になった。
弁当包みの一つへ、えんまが近づいたとき、しかし田の中から、百姓たちのけたたましいさけび声があがった。
(しまったッ、かんづかれたッ)
とんで逃げかけたが、足がもつれた。
だッと前のめりに、おちいは土へ転倒した。
鋤鍬をほうりすてて、百姓たちは八方から畦道めがけて駆けあつまってくる。
(どうしよう、えんま姉ちゃん、つかまっちまうわ)
おちいの心配をよそに、えんまはだが、薄い肩をそびやかして、ひとつところに突っ立ったままだ。逃げもどってくるけぶりもない。
その落ちつきに醒まされて、やっとおちいの耳も、さけび交しの内容を聞きわけるだけのゆとりを持った。
「お城の若さまがこられたぞう」
「若殿がお帰りあそばしたぞう」
そう、くちぐちにわめきたてながら、百姓たちは女や子供までが、われさきに畦へ走りあがってきたのだ。
(ああ、よかった。お弁当のことじゃなかったんだわ)
春の野づらが、うれし涙でみるみるかすんだ。

「どうしたおちい、こんなところに坐ってると、けとばされちゃうぞ」
もどってきたえんまは、しかしいまいましげに、若草の道へ唾をはいた。
「もうちっとのとこだったのに、とんだじゃまがはいりゃがった。盗みそこなったよ」
「若殿さまって、だれのこと?」
「しらないな。おおかた今川の役人だろ」
「あ、きたッ。あすこに見えたわ」
「どれどれ」
のびあがって、したり顔にえんまはうなづいた。
「やっぱり侍だ。蔓なりのからす瓜みたいにゾロゾロつながってきやがら。ありゃあ年貢の高をきめるための、検見の衆だぜ、きっと……」
このまにもあらそって、百姓たちは畦の両側にひしめき並んだ。土下坐する、地べたに額をこすりつける……。えんまがささやいた。
「おい、みろよおちい、あのおやじ、陽気のせいか気がふれたらしいぞ」
中年の百姓が、なにやらあわてふためいて、田んぼの泥を両手ですくっては、無精ひげだらけの顔になすりこんでいるのである。
「ほんと。おかしなことをするおじさんね」
「おら都で、男のくせに白粉つけた公卿って生きものを見たっけが、泥で化粧する気ちがいには、はじめてあった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

よ」
指さして笑うのを、
「シッシッ、静かにせんかい、この唄うたいのガキめらは……。殿さまのお通りというに、かがまりもせんで……」
あたりの百姓たちが叱りつけて、むりやり道のわきにしゃがみこませた。
六、七人の同勢の、先頭に立って近づいてくるのが、殿さまらしい。
前髪を払ってまもないのか、月代の剃りあとが青く、ういういしい。十六か、せいぜい十七どまりとみえる若い侍だった。
「若殿ッ、もどらしゃりましたかッ、いよいよ岡崎のお城にお帰りでござりますかッ」
村の長とみえる老百姓の、しわがれ声の尾について、涙ぐむ者、手をもみしぼる者など、こらえかねた顔、顔、顔が、どっとその足もとにむらがり寄った。
「ごりっぱに、成人めされて……」
「元服も、すまされたげな」
「もはや押しも押されもせぬご領主さまじゃ。のう殿、この三河をお治めなさるために、ご帰国になったのでござりましょうな」
堰を切ったような問いかけに、相手の若侍は静かな微笑で、
「いや、ちがう。はやまってはいけない」
かぶりをふった。
「ひさしぶりの、帰郷は帰郷だが、今川どののゆるしを得て、父上の墓まいりにもどったまでだ。半月ほど滞在したら、また駿府へ帰らねばならぬ」
失望のざわめきが、百姓たちの群れをゆすった。
「やっぱり、おもどりなされたわけではなかったのじゃ」
「やれやれ、憂いことのう。あいかわらずこれからも、今川衆の年貢はたりに、耐えてゆかねばならぬおれどもか」
その肩ごしに眼をやって、
「近藤、――そこにいるのは近藤ではないか」
田のくぼみのひとところへ、若殿は声を投げた。
「あッ、……うう」
うめきとも、息をひそめた悲鳴とも、聞きとれる返事だった。
「達者でいたか近藤治右衛門。……なにをためらう。ここへこい」
観念したように、へばりついていた地めんから身体を起こしたのは、あの、若殿の一行が近づく直前、しきりにあわてて、田泥を顔になすりつけていた中年の百姓である。
もぐらもちと、えらぶところのない面相を、面目なげに伏せて畦のすそへ這いより、巻いてある蓆をひろげて土ごぼうを二本とり出すと、よれよれの腰にさした。
「みろよ、やっぱし気ちがいだ」
おちいの背を、えんまはつついたが、これは彼女のひが目で、ごぼうと見えたのは黒ぬりの、はげちょろけな両刀であった。

「おやおや、するとあの百姓おやじ、侍か」
尻はし折り、縄だすき……。目もあてられない姿で道へあがり、足もとへうずくまる相手の、ひびわれた手をかたくにぎって、
「妻子の口をやしなうために、田仕事に傭われていたのだな」
若殿は声をつまらせた。
「恥じるな近藤、恥かしいのはむしろ私だ。ふがいない主人を持った因果で、ながの年月、譜代の家来、領民らが、どれほどの苦労をしいられてきたか。思えばすまなさに、はらわたが煮える……」
立ちあがると、百姓たちの耳にも沁ませる語調で、ひとことひとこと、
「でも、それももう、ながい辛抱ではないぞ」
力をこめて若殿はさとした。
「見てくれ。竹千代はこの通り成長し、名も松平次郎三郎元信とあらためて、一人前の男になった。時の流れは、けっしてうしろにはもどらない。時勢は移る。情況はかわる。こんどこそ……こんど帰ってくるときこそ……」
それだけで口をとじたが、目じりには、キラッと小さく、涙が光った。
畦道には、百姓たちのすすり泣きがひろがった。
供の侍も、ある者はうつむき、ある者はこらえきれずに手で顔をおおって、くいしばった歯の根から嗚咽をもらした。近藤治右衛門の声がもっとも高かった。
「もったいない。殿のご忍耐にくらべれば、われわれの苦労などもののかずでもありませぬ。……お待ちしております。三河の領主として、はれて岡崎の城へおもどりあそばす日を、たとえこの先、何年なりとも……」
「たのむ。あせらず、争わず、侍も百姓も心をあわせて、めいめいその、命ひとつを大切にな」
「はいッ」
「田ごしらえの、さまたげをしてすまなかった。それではゆくぞ」
「今日は、これからどちらまで？」
「父上のお墓へまいる。三月七日だ」
「ご命日でございますなあ」
「ささやかな供物だが、おそなえしようと思ってな」
「およろこびなされましょう。さぞや、泉下で……」
立ち去ってゆくうしろかげを、だれもが涙いっぱいの眼で、ぼうっと見送っているなかで、ひとり、感傷のかけらもないのが、えんまの表情だった。
「立つんだ。さッ、はやくはやく」
彼女はおちいをせきたてた。
「つけるんだよ。あの、若殿の一行を……」
「つけて、どうするの？」
「きまってらあ、お供物を盗むのさ。百姓どもの豆カス弁当なんぞねらうよりは、気がきいてるだろ」
「だって……」
おちいの足はすくんだ。

「相手はお侍よ。このあたりの、ご領主さまらしいし、もし見つかったらお手討だわ」
「へへ、ご領主がきいてあきれるよう」
手をひっぱって、ぐんぐん歩き出しながら、日にやけた鼻ばしらに不敵な小じわをよせて、えんまは冷笑した。
「殿だの若さまだの、ごたいそうなたてまつり方をするから、だれかと思ったら、ありゃぁお前、『千貫文のお竹さん』じゃないか」
「なんのこと？　それ……」
「あの若殿はね、ここ、三河岡崎の、城主のせがれはせがれだけど、小名の悲しさ、六ツか七ツのときに、駿河の今川へ人質にやられたのさ。ところがね。途中で田原の、なんとかいう武将にさらわれて、尾張の織田方へ、銭千貫文で売っとばされちゃったんだと……」
「まあ」
「今川勢は仕返しに、織田一族の守る出城を攻めて城主を生け捕りにし、三河のせがれと取りかえっこしたんだそうだよ」
「ではあの若殿は、いま今川の人質なの？」
「そういうことさ。三河へ帰れば若殿かもしれないが、尾張や駿河では下民まで、かげでは『千貫どの』としかよびはしないよ」
そんなやつのそなえる供物、盗んだところで大したことはあるものか、びくびくするなと言いたげな、ずぶといえんまの口ぶりだった。

夢候よ

息がはずむ、目がまわる……。
先をゆく若殿の仇名が、百貫文だろうと千貫文だろうと、じつはおちいにとって、どうでもよいことなのだ。
「ね、えんま姉ちゃん、お墓まだかしら。……お供物、とれるかしら……」
ひきずられて、あえぎあえぎ足をはこびながらも、そればかりが気になった。
「遠いなあ。どこまでゆくつもりだろ」
と、えんまもじれだした。見えがくれにつけてゆくのは、これでなかなかむずかしい。
「どこをどう歩いてるのか、見当もつかなくなったぞ。——能見ガ原かな」
やがてやっと、一行はとまった。
雑木にかこまれた百坪あまりの日だまりの、ちょうど中ごろに、大きな土まんじゅうが築かれ、上部に五輪の刻みを入れた角柱一本……。それによりそって、松の若木が細い枝をのばしている。囲いもなければ石塔も建っていない。墓所とは名ばかりの、わびしい一劃である。
風雨にさらされて柱の墨色は薄れているが、『古瑞雲院殿応政道幹大居士霊位』と、かろうじて読みとれた。
もとよりしかし、えんまやおちいに、四角い文字などわかるわけもない。

「あすこに、かくれていようや」
去年のままの枯草が、丈たかい茂みをつくっているかげへ、仔狐のすばやさでもぐりこんで、様子をうかがった。
墓所には僧が二人、先にきていた。
「おお、月光庵の隣誉さま。——大仙寺の俊恵蔵主まで、お越しでしたか」
若殿は声をあげた。
「昨夜おそく、ご帰城と聞き、ことに今日は、故殿の祥月命日、なにはともあれまず、ご墓参あそばすこととぞんじて、お待ち申しておりました」
「ありがとうございます。回忌々々の法要、墓掃なども、ねんごろにお勤めくださっているよし。感謝のほかありませぬ」
「なんの。先殿をはじめ、代々松平家の帰依をこうむってきた両院。若ぎみおるすのあいだの墓守りは、当然な務めでございます」
あいさつを交しあっているまも、なつかしさに、気もそぞろといいたげなそぶりで、若殿はあたりへ視線をただよわせた。
「松が……あのときの、墓じるしの松が、見ちがえるほど大きくなって……」
「はい。七年前、織田どのの手から今川方へ移られるさい、ふるさとを通過あそばす一日の暇に、若ぎみおんみずから植えてゆかれた苗木の松も、ご成長と足なみをあわせて、あのようにみごとな若木においたちました」
香炉がすえられ、家来たちの手で供物の折敷がならべられた。
「おひさしうぞんじます父上ッ、次郎三郎元信、展墓のため帰国いたしましたッ」
草むらにひそむ二人の眼は、だが、
(ああ食べたい、……はやく食べたい)
胃ぶくろのあがきにせきたてられて、灼けつくように、供物にばかりそそがれていた。
ばかばかしくながい読経だった。
墓標の下にひれふして、かわるがわるかきくどく主従の愁歎も、死者とかかわりを持たないえんまやおちいには、ただ、じれったい泣きしゃべりとしか聞こえなかった。
「ええ、ちくしょうッ、いいかげんに切りあげたらどうなんだい」
草のかげから、眼ばかり光らせて、えんまは小声で悪態をついた。
「父上、あすもまた、まいります。せめて帰省中だけでも、欠かさずに……」
生き身の人に言うように約束して、次郎三郎元信はようよう立ちあがった。
「このまま、ご帰城あそばしますか?」
と、大仙寺の俊恵であろう、横ぶとりの体軀に猪首をめりこませた、あから顔の和尚がたずねた。
「いや、領内をすこし廻ってみます。腰糧も用意して出てまいりました」

「そちこち屋……。よろしければ、寺で弁当をおひらきあそばしませ。ご承知の貧寺。おもてなしとてできませんが、茶釜に湯はたぎっております」
「では、ごぞうさになりましょうか」
ひきあげてゆくうしろ姿が、疎林のはずれに見えなくなるのをうかがいすまして、
「いやあ、やっとこさ消えてなくなりやがった」
えんまは枯草の中から躍り出した。
「さあこい、おちい。食おうぜ」
折敷は二つ……。
その、それぞれに新らしい杉原紙が敷かれ、一つにはつきたての粟餅、一つには煎り豆まじりのおこし米が、山なりに積みあげられてあった。
「いっぺんにほうばるな。腹がすききってるときガツガツつめこむと息がつまるぞ。よく噛んで、すこしずつのみこむんだ。いいか、おちい」
「ええ、ええ」
うまかった。気が遠くなるかと思った。
うすく塩味がついているだけの粟餅、煎り豆だが、こうばしい香りと味は、口の中にとろけるようにひろがって、おちいを恍惚とさせた。
「こいつはいいや。待ったかいがあったな」
しんそこ満足げに、えんまも言った。
「食いきれないぶんはふところにねじこめ。置いてくことはないぞ」
夢中になりすぎたのである。
日ごろ敏感なえんまの耳が、しのび寄ってくる足音を、まんまととらえそこなった。
「こいつら、ふといやつだッ」
大喝におどろいて、
「わッ」
とびあがったときには、二人とも衿がみをつかまれて、宙につるしあげられていた。
「なにをしやがるッ」
えんまはあばれた。歯をたて、爪をたてたが、相手はびくともしない。泣きさけぶおちいを片膝でおさえ、刀の下げ緒をぬくと、たちまちえんまを、うしろ手にしばりあげてしまった。
見ればまだ、前髪だちの少年武士だ。
「あ、お前は『千貫文のお竹』の家来だな。行列にくっついていやがった顔だッ」
えんまの猛りに、
「なんだ、『千貫文のお竹』とは、だれのことをいうのだッ」
少年の血相も、青白く変った。
「しらないのか、お前の主人の仇名じゃないか。売っとばされたり取りかえされたり、へッ、ざまはないや」
「おのれッ」
柄がしらにかかった手へ、おちいがしがみついて、
「ごめんなさいッ、お侍さま、かんにしてッ」

死もの狂いの哀願をくり返さなかったら、えんまはその場で、斬られていたかわからない。
こづかれ、曳きずられ、ひっ立てられて能見ガ原をくだり、二人が大仙寺の門内へつれこまれたとき、松平元信主従もついたばかりとみえて、家来は井戸端にむれて手足の土ぼこりを洗ってい、元信自身も客間の縁に腰をおろして、すすぎのたらいに足を入れているところであった。
ひっくくったえんまを先に立て、おちいの手をつかんで、庭木戸を廻りこんできた少年武士を見て、
「新六郎ではないか。どうしたのだ」
元信はけげんな顔をした。
「墓荒しです」
「なに」
「腰の印籠を紛失しましたので、もしやご墓所にと思ってひき返したところ、この旅芸人の女こじきめらが、古瑞雲院さまにおそなえした供物の折敷を、わがもの顔にかかえこみ、粟餅も、おこし米をも」
「あさり散らしていたというのか」
「はい」
近習のさし出す手拭で、足指のひとつひとつをこくめいにふきながら、
「誤りは、こちらにあった」
元信は言った。
「三河の民のくらしは苦しい。旅廻りの唄うたいに、銭一枚めぐむゆとりはあるまい。餓えにせまっての盗みだろうし、この子らがとらなければ後刻、里のわらべが盗みに集まったにちがいない。ご墓前を荒らされるのをふせぐ気ならば、供養のあと、旅の者、里の者にほどこしてやればよかったのだ。置いて去ったのは当方がわるい。とがめるな新六郎、しばった手を、自由にしてやれ」
「そこに気がついたか、とんまめ」
庭土にじかに、押しすえられていても、えんまの鼻っぱしはつよかった。
「おらたちだって尾張を廻ってたころは、ふところがふくふくだったんだ。それがどうだい、三河へ足をふみ入れたとたんに、ばったり稼ぎがとまっちまったあ。貫いだめは底をつく腹はへる。しょうことなしの墓荒しだぞ」
「だまれこいつ……。上さまに向かって頬げたたたくなッ」
背中を一つ、思いきりどやしつけたあと、えんまのいましめを、少年武士はしぶしぶほどいた。
足をふき終った元信は、座敷にあがり、敷物の上に座をしめて、あらためて庭さきへ目をやった。
日にこげぬいて金仏さながら、少女の一人は色が黒い。顔だちはひき緊って、黒いながら、皮膚には強靱なぬめりをたたえている。ツンと通った鼻すじ、ゆだんなくうごく大きな眼……。
頭はわるくなさそうだが、もとより無知、そして野性。世間苦に揉まれ、叩かれ、きたえあげられて、動物的なカンと狡智を身につけた旅かせぎの漂泊の子である。
鞭にも手綱にも馴らされない山野のけものと、これを見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com